

月刊誌『文藝春秋』に芥川賞受賞作が掲載された時は、必ず買って、読むようにしている。文学的な感性に乏しいから、少しでも、現代文学に親しもうと思っているのである。しかし、最近の芥川賞受賞作は、私には難解である。まず、作者の鋭敏な感受性に付いていけない。文体が飛躍し、状況把握が容易ではない。聞きなれない言葉が多く、私などは、関知していない出来事を背景にしていることが多いので理解できない。芥川賞受賞作は短編であるが、読み疲れる。一方、直木賞受賞作は長編であるが、物語性があり、私には遥かに読み易い。感性の乏しい、時代遅れの老人になったのだと、つくづく思う。

今回の芥川賞は、市川沙央氏の『ハンチバック』が受賞した。「ハンチバック」とは「せむし」のことで、市川氏は「先天性ミオパチー」という病を負い、幼児期から筋力が低下し、立ち上がり難いなどの症状が出る。筋力が落ち、心肺機能の低下で仰向けになる時には人工呼吸器をつけている。肉体的には相当の苦勞があるが、勉学や世への関心には人一倍の努力をしていることに、とにかく敬服する。そのような難病の障害者の受賞は初めてのことで、色々な報道がなされていた。『ハンチバック』は作者の現実と願望や妄想を交えて書かれている。評論などができないので、思い着くままの感想を書きたい。

まず、下記の文章に考えさせられた。「厚みが3、4センチはある本を両手で押さえて没頭する読書は、他のどんな行為よりも背骨に負担をかける。私は紙の本を憎んでいた。目が見えること、本が持てること、ページはめくれること、読書姿勢が保てること、書店に自由に買いに行けること、—5つの健全性を満たすことを要求する読書文化のマチズモ（男性優位主義）を憎んでいた。」私は紙の本が好きだ。何頁くらいの何行目くらいのところに書いてあったと見返すことができるからである。年金生活者になり、買うことを控えながらも、本屋に出かけて行って買い、読むことは私の楽しみである。恥ずかしながら、障害があって、紙の本を読めない市川氏のような人がおられることを考えてもみなかった。パソコンやスマホで、本が読める状況は読者層を大きく広げたであろう。

市川氏の望みは、妊娠して、中絶することである。出産には耐えられない、育児は無理であるからである。生殖機能に問題ないから、妊娠し、そして中絶してみたいと言う。かつて、市川氏ほどではないが、ハンチバックで、健康とはほど遠い女性と知り合った。夫は盲人の鍼灸師であった。彼女は妊娠し、産婦人科を尋ねたが、どの医者からも出産は無理と言われた。しかし、彼女は命がけで男の子を出産した。愛情を込めて育て、息子は特別支援学校の教師になった。女性は妊娠、出産を望むのではないか。市川氏は、健康で生まれ変わった時は「娼婦」になりたいと言う。『ハンチバック』には性的記述がかなりあり、それは極めて濃厚である。受賞インタビューで、「父は破廉恥さに激怒しました」と言っているが、娘がこんなシーンを書くことに怒った父親の気持ちも分かる。芥川賞を受賞したことで、まんざらでもないんじゃないですかと言っている。

平野敬一郎氏の「難病当事者としての実人生が色濃く反映された作品だが、健全者優位の社会が『政治的に正しい』と信じる多様性に無事に包摂されることを願う、という態度とは根本的に異なり、障害者の立場から、社会の欺瞞を批判し、解体して、再構築を促すような挑戦に満ちている。文体には知的な重層性があり、表現もよく練られていた」という書評に納得がいく。市川氏は「障害者関係の記事についている差別的なコメントを見かけしだい通報するのが趣味です」と語っている。障害を持つ弱い自分をさらけ出しているが、実は強い自分に反転させ、世に問うているのではないかと、私は読んだ。